

生家は一級河川を臨む高台にあった。そこは親のふるさとではなく、父の仕事のために移り住んだ町だった。港町・横浜が母のふるさとで、ふたりの出会いの場であり、常に帰りたい場所だった。そのためか娘も、横浜、神戸、長崎など、異国情緒あふれる坂道だらけの町に憧れて育ち、いつか海を見おろす丘の上に住むと思っていた。やがて時は流れ、いまは街中の高台で暮らしているが、なぜか、海より山に縁が深くなった。

人生を変える出会いとなった初登山は、3泊4日で縦走という想定外にハードな山登りだったにもかかわらず、次々変わる自然の姿に辛さも吹き飛び、気づけば頂上に立っていた。体力にも運動能力にも自信のない人間だったのに、登りはじめから下山までのすべてが楽しかった。40歳という、そう若くもない年齢がよかったのかもしれない。

山を知って一番変わったことは、自分が身を置き、見て、感じたことを信じる人間になったことだろう。人は、あふれ

る情報のなかで、たくさんの予断を持つ。きつこうに違う。こうに決まっている。だったらおそらく好きではないから、やらなくてもいい。山もそんなイメージだった。ネガティブにしか見ていなかったものなのに、実際やってみたら、そんな印象は次々くつがえされていった。

初めての山は、思い込みを一つひとつ体験に置き換えてくれ、そのとき見た森羅万象は、肉体に負荷がかかった分、確実に身のうちに残り、じわじわ後を引いて感動を生み続けてくれた。競争ではなく、心と対話し、人や自然と共感しながら登ることも性に合い、想像と体験は間違いなく別ものだった。

遠くからどんなに切り立って見える山容でも、近づけば思いのほか広い登山道があるものだ。「あんなに急坂を登るなんて、私には無理無理!」と笑ってしまうこともたくさんあったが、ほとんどの場合、麓からそう見えるだけで、近づいてみると、人が数人すれ違えるほどの広さがあった

り、急坂ではあってもしっかりと一歩を踏み出せる幅があるものだ。あのとんがった槍ヶ岳の山頂だって、二、三十人は座れるだけの広さがある。もちろん剣岳のように、見えているほどに厳しく、張りつくように登る山もある。とまどぅばかりの瓦礫の崖を、つかんだ石がいつ剥がれおちるか、と、どきどきしながら登ったものだ。でも、岩がしっかりとさえいれば、そこに張りつき、からだを宙に投げ出すように登っていくことは、身内に潜む野生がぐっと頭をもたげ、原始の血がわき立つようだ。人は大自然の一部なのだと、得も言われぬ幸福感がわきあがってくる。

登山は、危険でないとは言えない。辛くないとも言わないが、辛く危険なだけなら続けられない。ましてや、行くと思っただけで、にんまりするほど楽しい気持ちになどならない。達成感というか、自らつかみとる喜びは、何にも代えがたいものがある。

登山家の田部井淳子さんは、初対面の時「8,000mの山

も一歩一歩なのよ」と言った。いまこの言葉がしみじみわかる。切り立つ崖も、足元の石も、その質を、自分の目や手で確かめ、もろくないか、ぐらつかないか、すべりやすいかを判断し、一歩一歩、本気で目の前のことに向かい合いさえすれば、エベレストの頂上も夢ではないのだろう。行くか、行かないか、自分が何を必要とし、何を選び取るかの差なのだと思う。

あんな斜面も、こんな坂道も、足元に一歩置く場所はどこかにある。誰かから聞いたことではなく、見たもの、体験したことをよりどころに、一つひとつ自らつかんでいく。そんな当たり前のことを、登山は教えてくれた。

高みから見おろす景色は、海も山も、等しく美しいものだから、のんびり海を眺めて暮らすのは、もう少し年を重ねてからでもいいかな…と思う。

剣の雄大な山々と剣沢キャンプ場

特集  
斜面の見せる顔

MESSAGE

山に魅せられて



市毛 良枝  
ICHIGE Yoshie

プロフィール

1950年静岡県出身。文学座附属演劇研究所・俳優小劇場養成所を経て1971年、テレビドラマ「冬の華」でデビュー。以後、映画、テレビ、舞台と幅広く活躍。40歳から始めた登山が趣味であり、最近では登山の経験をいかした執筆活動や講演会なども行う。環境問題にも関心を持ち、1998年には環境省の環境カウンセラーに登録された。その他、非営利活動法人日本トレッキング協会の理事を務める。主な出演作に、テレビでは「サイレント・ブア」「芙蓉の人」「同窓生」「ボクの妻と結婚してください。」「危篤スルー」「誤断」「釣りバカ日誌～新入社員 浜崎伝助～」「釣りバカ日誌 Season2 新米社員 浜崎伝助」「神様から一言」「駐在刑事」「白い巨塔」「磯野家の人々」「駐在刑事 Season2」「M 愛すべき人がいて」など多数。映画では「神様のカルテ2」「六月燈の三姉妹」「春を背負って」「駅までの道をおしえて」「望み」など。